

新装版の序文

私はここ何年かの間に数冊の本を書いたが、本書を書くのがいちばん楽しかった。本書では当時興味をそそられたさまざまな社会現象を取り上げているが、この興味はいまも持ち続けている。W・W・ノートン社から新装版の刊行が提案されたのは、同じく興味を持つてくださった読者が多いということだろう。

執筆したのはもう30年も前のことだ。それでも私はときどき取り出して懐かしくページを繰ることがある。予備知識なしにこの本を読む人は、著者が経済学者であるとは思えない。こう想像すると楽しい気持ちになる。技術的なモデルや数学を使わずに重要なアイデアを提示できたと思うとうれしい。本書を読んだ多くの人が最初のパラグラフを長く覚えていてくださることに、いまだに驚かされる。

2005年に私がアルフレッド・ノーベル記念経済学スウェーデン国立銀行賞を受賞したことをご存知の読者は、本書が受賞にながしかの貢献をしたのだらうと思われるかもしれない。だがは

つきりしたことはわからない。ロバート・オーマンと私を選んだ委員会は、特定の著作を挙げなかったからだ。ただ、受賞発表の際に「ゲーム理論の分析を通じて対立と協力の理解を深めた功績に対して」授与するとの文言はあった。この本はゲーム理論と関わりがあるだろうか。

ゲーム理論とは、2つの可能性の間のよりよい選択、あるいは複数の可能性の間の最善の選択が他人の行う選択次第で変わる場合に、合理的な人間はどのように選択するかを追究する学問だと私は定義している。だとすれば、本書はまさしくそれを、すなわち「相互依存的な選択」を扱っている。ゲーム理論の研究者の中には、ゲーム理論とは意思決定の数学的分析であるというふうには、より狭い定義をする人もいる。一方、私は数学を多用したことはない。それもあって、ノーベル賞の選定委員会はあまり厳密な定義をしなかったのだろう。執筆中に、これがゲーム理論の本だと考えたことはなかった。だが本書が多人数ゲームの理論を扱った本だと受けとられることに異存はない。私自身の意見を聞かれたら、第7章はゲーム理論を扱ったと答えただろう。

ここで取り上げたゲーム理論に関心を持たれた読者は、ノーベル賞の受賞理由に関連する他の著作にも興味があるかもしれない。そこでこの場を借りて『紛争の戦略——ゲーム理論のエッセンス』（河野勝監訳、勁草書房、2008年）を挙げておきたい。同書にもあまり数学は出てこない。こちらは多人数ゲームではなく、主に2人が関与するゲームを取り上げており、ノーベル賞授賞式の際に行った記念講演といくらか共通性がある。私がどんな話をしたか、きつと読者が知りたがるにちがいないとの編集者の奨めにより、このときの講演も末尾に収録しておいた。

* * *

ここに書かれているアイデアはどこでどんなふうに思いついたのですか、と質問されることがよくある。この質問に答えるのはむずかしい。どれも30年以上前のことだ。何かの行動を見ていて好奇心を刺激され、そこからアイデアが浮かんできたのだと記憶する。本の中に示された例を読むと、まずアイデアがあり、それをわかりやすく説明するために例を挙げたのだと考えるかもしれないが、じつは実際からアイデアが導かれたことの方が多い。「協力」を説明するために交通信号の例を挙げたが、実際には信号のおかげで協力を理解することができたのである。高速道路上に落下したマットレスが渋滞を引き起こした例も使った。マットレスを迂回する渋滞の列に並んでいるドライバーは、何が起きたのだろうといらいらする。だがとうとう自分の番が来て通過してしまふと、誰もわざわざ車を停めてマットレスをどかさうとは考えない。これは私自身が経験したことだ。多くの読者は、理論そのものよりも例の方を鮮明に覚えているだろう。そして例を手がかりに、理論の組み立てを思い出すのではないだろうか。アイスホッケーの試合で選手が負傷したという記事を読んだことがある。そうした怪我は、ヘルメットさえかぶっていれば防げたはずものだ。この記事が、競って自らを危険にさらす行動の動機を理解するきっかけとなった。読者はきつとホッケーの例を覚えていて、そこから理論を思い出すことだろう（いまだったら、私はステロイドを例に挙げたかもしれない）。

本書は、もともと本にするつもりで書かれたものではない。第1章は、全体の道案内をするため

に設けた。それ以外の章は、本の構想が形になる前に個別に書いたものである。だが最終的には、本としてうまくまとまったと思っている。最後の章としてノーベル賞受賞記念講演を新しく付け加えたが、ここでは半世紀にわたって考え続けてきたことを語った。この講演を収録した理由を聞かれたら、社会的・国際的な行動規範の進化を論じているからだと答えよう。規範に従う意思決定がその規範を一段と強化する、ということだ。

新装版がこの先30年もまた多くの人に読まれることを祈りつつ。